聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。見せしめのため、他の殉教者とともに左耳をそがれた。

発行日：2015年7月31日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館
〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/

時代を貫いた言葉「御大切」

日本二十六聖人記念館長　レンゾ・デ・ルカ

「神の愛」は「御大切」

今年は信徒発見百五十周年、高山右近帰天四百周年、原爆七十周年と言った「記念の年」に当たります。「記念」は共同体の意識を形成すると同時に、それを保持し、発展させていきます。記念は、忘れてはいけない出来事を指しています。イエスの教えの中でも記念すべき、忘れてはいけない「言葉」があります。そこで現代のカトリックの「愛」に当たり、キリシタン時代には同義に用いられていた「御大切」という言葉を紹介したいと思います。この大事な言葉は、キリシタン書物の翻訳に関わった日本人が選んだのでしょう。ここで、ザビエルが十六世紀の日本に伝えた「神の愛」が、当時の日本人に「御大切（ごたいせつ）」と〝翻訳〟されてどのように使われたか、を各種の文献に見たいと思います。

バチカンにある「バレト写本」

キリシタン時代の書物、「バレト写本」（一五九一年・注）に、「イエスの御母と御大切に思し召す弟子を御覧あってサンタ・マリヤに、如何に女人その身の子を見られよ。弟子に、汝の母はこれなり」とあります。新約聖書のヨハネ福音書で「愛する弟子」（ヨハネ十九・二六）と訳されている箇所には「御大切」が用いられているのです。そして、その意味は確実に伝わります。この分かりやすくなおかつ、深い意味を持つ「御大切」は重要なキーワードだったでしょう。

（注）「バレト写本」＝ポルトガル出身のマヌエル・バレト神父が、天正四少年使節とともに来日。長崎県大村で日本語習得のため、要理書、聖人伝などをポルトガル式綴りローマ字で筆写した。写本は天草のコレジオや日々の祈りに使われた。バレト神父は一六二〇年、江戸近郊で五六歳で帰天。

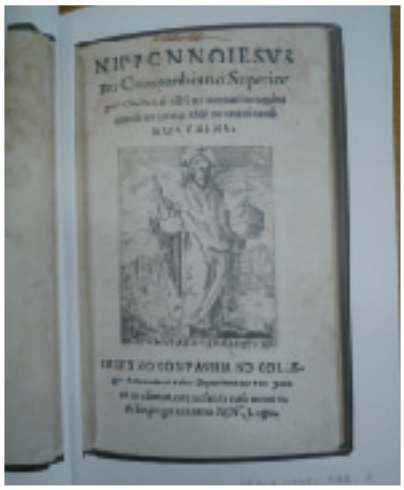
『おらしょの翻訳』（一六〇〇年）に、「スピリツ・サント〔聖霊〕は御親と御子より出で、互いの御大切にてまします。」と説明されます。『懺悔録』（一六三二年）に、三位一体について、「その御一体は三つのペルソナス、御親と、御親の御子と、また、御親と御子の互いの御大切でござる。」とあります。神様の交わりを分かりやすく説明されています。難しい概念も普通に使う言葉を用いてキリシタンの教えが広がりました。

御大切と大切の使い分け

この言葉は要理書にも多く使われました。『どちりいな・きりしたん』（一五九一年）には、「先ず我等に対せられての御大切の深く甚だしきほどを知らしめ玉ふをもって、デウスを御大切に存ずる事もふかゝらんが為也。」と書いてあります。ここで、同じ「御大切」を使って人間の応答に当てはめることによって、人間と神様との密接な関わりを見事に分かりやすく説明しています。

マリア様についても「御大切」が用いられました。『スピリツアル修業』（一六〇七年）に、「人に勝れてご大切に燃立ち給ふ御母には如何でか始めに見え給はざらんや？」、また「御主御母に対しご丁寧を尽し給ふ如く、み弟子たち、そのほかの善人たちにもご大切を顕はし給ふことを観すべし。」と書いてあります。

『さんたまりやの御組』の規定に、「デウスの御大切並びにホロシモ〔隣人〕の大切、へりくだり堪忍し互いに善をば何ともとむべきや。」とあります。ここで、あえて「御」を付けた神の愛と付けてないことによって人間の愛が区別されますが、いずれにしても同じ源から出てることが十分に伝わります。



天草で印刷されたローマ字の要理書
（上智大学キリシタン文庫蔵）

キリストの死は最大の「御大切」

秘跡との関連でもやはり御大切が用いられました。『長崎サカラメンタ提要付録』（一六〇五年）に、「各々のアニマを扶け給はんため、御自身死し給ふは言ふに及ばず、各々のアニマの食となりたまひ、このサカラメント〔秘跡〕を以て並びなき御大切の尊きしるしを世界に残し置き給ふ也。」とあり、ご聖体に対しても同じ語彙が用いられました。

洗礼の秘跡を説明する『ばうちすものさずかり』に、「〔悔い改めは〕御大切に存じ奉るべきデウスを、背き奉りたる所を深く悲しむべし。」とあります。

御大切が、すべてを赦す

「御大切」は日本の教会の特徴を表します。それは大事な言葉であるだけでなく、人の生き方、理想でもありました。迫害が緩かったときに互いの支え合い、その慈悲を示すことによってキリスト教の精神を表しました。迫害が激しくなってからは、それを耐えて潜伏した共同体の力となりました。その迫害に対して復讐や怨みを表すことなく、「赦し」の心を持ち続けたことも、この御大切があったからこそだ、と思います。殉教者を模範と仰ぎながら、痛悔の心をもって神か

（次ページ４段目へ）

キリシタンの増加と信仰の深まり

東京大学名誉教授
五野井 隆史

禁教前に三七万人のキリシタン

徳川幕府が全国的な禁教令を発した一六一四年一月の時点で、推定で三七万人前後のキリシタンがいた。宣教当初、農漁村では農民や漁民、都市では貧者や病者がキリシタンになり、医者・学者・仏僧の有識者が僅かに改宗した。一五六三年、肥前の戦国大名大村純忠や平戸の国人領主たちが受洗し、同年畿内地方でも国人領主層の改宗者が多く出た。布教保護状を交付した将軍足利義輝が一五六五年に暗殺されると、宣教師は京都から追放されたが、一五六九年フロイス神父は織田信長の保護を得て都に帰還した。翌年オルガンティーノ神父が上洛し、一五七六年畿内のキリシタンたちの協力で三階建ての南蛮寺、所謂教会が建った。同教会は都の名所の一つとなり、教会前には赤と黒の南蛮帽(南蛮笠)を売る店があった。

領主層の改宗が続く

一五七六年から一五八五年にかけて領主層の改宗が続き、九州では有馬義直・晴信父子や大友義鎮(宗麟)、畿内では高山右近の勧めによって牧村政治・蒲生氏郷の茶人仲間や黒田孝高らが改宗した。右近の高槻領内では父ダリオ友照が「慈悲の組」を組織し、その組頭四人を選任して信者の信仰の強化、異教徒の改宗、貧者訪問、死者の埋葬等に当たらせた。一五八三年大坂城築城後、城下に河内岡山の教会が移築され、同教会が畿内宣教の中心となった。イエズス会の準管区長コエリョが大坂城に豊臣秀吉を訪れたのは一五八六年である。

突如下されたバテレン追放令

一五八七年七月、秀吉は筑前博多で突如伴天連追放令を発して、高山右近を改易して領地を没収した。キリシタン大名や領主の多くは棄教し、都の南蛮寺を含む多くの教会が壊された。畿内や四国にいた宣教師は九州に下り、表面だけ棄教した有馬晴信の領内におよそ七〇人の宣教師、大村喜前の領内に一五，六人、天草領に六人が潜伏した。潜伏したパードレやイルマンたちは信者たちにキリスト教理を基礎から理解させ、新たな教理の知識を教え始めた。このため、信仰を取り戻して積極的に祈りを覚えて教会に通い始めた者も多く、説教を聴いて告解をするほどであった。大村のキリシタンたちは、少なくとも年一回告解し、毎年三度は聖体拝領に与り、生命の危険にある病人は終油の秘跡を受けるために告解をしなければならないことを学んだ。

一五九〇年七月、ヴァリニャーノが天正遣欧使節四人を伴いインド副王使節として再来日した。有馬セミナリオの一、二期生である遣欧使節は、宣教師たちの福音活動が日本人に受け入れられるために、ローマ教皇とカトリック世界の偉大さと繁栄ぶりを日本人に伝える語り部として遣わされた。彼らは帰国後イエズス会に入り、三人が司祭となった。原マルチノは追放地マカオで一六二九年に客死し、中浦ジュリアンは一六三三年一〇月長崎で穴吊るしの拷問を受けて殉教した。彼らがリスボンから招来した金属活字印刷機で教理書『どちりいな・きりしたん』や修養書『コンテムツス・ムンヂ』(『キリストの倣び』)が印刷され、キリシタンたちの信仰を深める手立てとなった。殉教者列伝『サントスの御作業の内抜書』は殉教に対応するために一五九一年に印刷された。

江戸、東北で激化する弾圧

一五九三年フランシスコ会宣教師が来日し京都を中心に医療をもって宣教活動に従事したが、サン・フェリーペ号事件が発生し、一五九七年二月長崎・西坂で同会士六人を含む二六人が殉教した。秀吉の死後、徳川家康のマニラ貿易の仲介者となったフランシコ会士は一五九九年江戸に教会を建て、一六〇二年浅草・鳥越に施療院を開いた。江戸の教会は一六一二年発令の禁教令により壊され、翌年鳥越に小教会が造られたが、そのために二八人が殉教した。一六一九年京都でキリシタンのみ五三人が火刑になり、一六二二年に長崎で五五人が処刑され、翌年江戸・札の辻で五〇人が殉教した。これを機に東北でキリシタン検索が強化され、一六二四年二月仙台広瀬川でカルヴァリョ神父を含む七人が殉教した。長崎の住民がキリシタン信仰を禁じられたのは一六二六年である。宣教師の日本渡航は困難になり、ローマ帰りの岐部ペドロ神父は一六三〇年マニラから密入国し東北に潜伏したが、島原の乱後の一六三九年に捕らえられて小伝馬町の牢で拷問死した。

らの「赦し」を期待し続ける源でもありました。七世代も信仰が伝わった理由の一つとして、この御大切から生じた人間に対する赦しがあったからだと、私は思います。聖パウロ三木が長崎・西坂の十字架上で殉教する前の最後の説教が、「赦し」中心となったことは決して偶然ではありません。むしろ、御大切を受けいれ、それを最後まで生きたキリシタンの心であり、後の殉教者の模範となりました。

長崎・大浦天主堂での百五十年前の「信徒発見」も、民を見捨てない神様がおられる信仰こそ御大切の現れでした。現代の教会も、より分かりやすくキリスト教の特徴を表す「言葉」を探し続けたいと思います。

声

叡知と魂の宝庫の源は『霊操』と『イエズス会会憲』でした

次良丸 睦子（聖イグナチオ教会信徒）

イエズス会士，聖パウロ三木（1564-1597）は，日本で最初のキリスト教殉教者でした。伝記によると，左耳をそがれて磔刑に処せられました。それは二人の執行人が両脇から槍で同時に胸を突くという残酷なものでした。死の間際，彼は群衆に向かって叫びました。『私は主のように十字架の上で死ぬことをもって潔しとし，神に感謝します。主と同じように，私の心も槍で貫かれます。この地上に流す私の血と私の愛が，主の御国のために，豊かな実りをもたらしますように』と。三人の日本人イエズス会士を含む26人は，日本最初の殉教者たちでした。長崎の西坂の殉教地は，400余年の歳月を経た現代でも，聖霊が充満した最も神聖な聖地です。

偉大な殉教者聖パウロ三木の御名を冠する聖三木図書館は，この聖人にふさわしく，いつも静謐で清らかな雰囲気が漂い，神と出会うことのできる聖なる場所です。この図書館で私は幾多の聖者と出会いました。一冊の本を手に著者の魂に向かい合い，これにふれるとき，キリストとの深い霊的一致と愛の交流が，そして神学の全宇宙的な深遠な理論が，心の奥に強く迫ってきます。叡知と魂の宝庫の源は，聖イグナチオ・デ・ロヨラ著すところの『霊操』と『イエズス会会憲』で，まさに神との出会いでした。『イエズス会会憲』を探し求めて何年間かの歳月のうちに，時は2011年6月に起こりました。新しく刊行されたばかりの『イエズス会会憲』をご紹介下さったのは，聖三木図書館長　宗正孝先生でした。おかげ様でイエズスの聖心会会憲の執筆も一気に進みました。宗先生には謹んで心より御礼を申し上げます。

「リスク」と「犠牲」の差異

宗教学者　山折 哲雄

国会論議でのリスクとは？

国会では、「安保」法制をめぐっていろんな議論がおこなわれました。「憲法」をどう考えるか、『集団的自衛権』と「九条」はどうかかわるのか。

その審議の模様を見たり聴いたりしていて、気になることがありました。もしも自衛隊が軍事的・戦闘的行動にまきこまれた場合、自衛隊員の生命にどのような危険が及ぶのか。細かい議論が行われていたのですが、与党の議員も野党の議員もしきりに「リスク」という言葉を使っていました。「リスク」が増大するとか、抑止されるとか、いい合っていたのです。それが何とも他人ごとめいた議論にきこえてきたのであります。

あまりに安易な考え方

自衛隊員の生命が危険にさらされるというのは、なるほど「リスク」の一つの状態ではあるでしょう。別に間違っているわけではありません。けれどもわれわれの日常生活のまわりには、いつもいろんな「リスク」が発生している。よく考えてみると、リスクのない生活などおよそ考えることもできない。そのような日常的におこる危機や危険をあらわす言葉を、軍事的・戦闘的行動において生命を危険にさらす自衛隊員たちの場合にあてはめて用いるのは、やはり穏当な話ではないでしょう。あまりにも安易な考え方ではないでしょうか。言葉が、何とも軽いのです。

「犠牲」というべき任務

端的にいって、国民の生命と財産を守り国を守る自衛隊員のリスクは、時には生命を賭けるリスクである。それはことの本質において、「リスク」という言葉よりも、むしろ「犠牲」という言葉によってあらわすのにふさわしい任務であり、行動であろうと私は思うのです。

その行動の重大性とその意味するところは、よく政治学や社会学などで使われる「リスク」論などでカヴァーし切れるようなものではないからであります。

なぜわが国会議員たちは、このような中間的なだけで意味不明な言葉を使って自衛隊員たちの生命にかかわる重大問題を議論しつづけているのでしょうか。その無責任な態度に気がついていないらしいことに驚かされるのです。

英国下院にみる「犠牲」

あらためて戦後七十年をふり返ってみるとき、われわれの社会がこの「犠牲」という言葉をいかにタブー視し、見て見ぬふりをしてきたかがわるような気がします。直視すべきことをリアルに語ろうとしない、怯懦の歴史だったことが浮上してくるのであります。

参考のために、英国の場合をとりあげてみましょう。英国下院議会の開会中には、毎週水曜日になると「党首討論」（首相のクエスチョン・タイム）がおこなわれます。そのさい首相は討論をはじめる冒頭で、イラクやアフガニスタンで戦死した犠牲者一人ひとりの名前を挙げて、その所属とともに読み上げる慣わしになっております。国家のために犠牲になった同胞の鎮魂のため、追悼と感謝の言葉を表明するのであります。

勇気と献身をたたえる慣例

たまに名前が出てこない場合がありますが、それは、まず戦死の発表が名前抜きでおこなわれ、遺族への連絡がついてから実名が発表されるという英国の慣例によるもののようです。その追悼の言葉は、戦死者の勇気と献身をたたえ、その「自己犠牲」の精神を忘れない、という決意でしめくくられます。

わが国会も、もって他山の石とすべきことではないでしょうか。

【山折 哲雄氏】一九三一年、サンフランシスコ生れ。岩手県花巻出身。東北大学文学部インド哲学科卒業。同文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、同所長。著書は『神と仏』、『近代日本人の宗教意識』、『親鸞を読む』、『空海の企て』など。

近頃、聖三木図書館でよく読まれている本　2015年6月

マザーテレサ来て、わたしの光になりなさい！	マザー・テレサ著	女子パウロ会
教皇フランシスコ講話集２	教皇フランシスコ著	カトリック中央協議会
吉満義彦：詩と天使の形而上学	若松英輔著	岩波書店
神学の思考：キリスト教とは何か	佐藤優著	平凡社
シスターたち：その歴史と今と未来に向かって	林義子著	女子パウロ会
遺稿集「南無アッバ」の祈り⊠	井上洋治著	日本キリスト教団出版局
それでも誰かが支えてくれる⊠	高木慶子著	大和書房
永井隆：原爆の荒野から世界に「平和」を	片山はるひ著⊠	日本キリスト教団出版局
聖路加病院で働くということ	早瀬圭一著⊠	岩波書店
イチジクの木の下で	山浦玄嗣著	イー・ピックス
いと高き貧しさ：修道院規則と生の形式	ジョルジョ・アガンベン著	みすず書房
司祭平服と癩菌：岩下壮一の生涯	輪倉一広著	吉田書店
帰還兵はなぜ自殺するのか	デイヴィッド・フィンケル著	亜紀書房
漫画塩狩峠	三浦綾子原作	いのちのことば社
こころのティースプーン	ハビエル・ガラルダ著	聖母の騎士社

【お知らせ】

◎夏休みの長期貸出について

八月十八日（火）～三十一日（月）までの夏期休館に伴い、七月二十八日（火）から長期貸出を始めます。

休館中の返却は入口の返却ポストへ。

◎二〇一四年十月一日（水）より開館時間が変わりました。

新しい開館時間は次の通りです。

月～土　十一時～十八時

日　十時～十七時

休館＝木曜、月末の館内整理日、祝日、年末年始、夏期休暇

閲覧室中央にある聖母子像

【友の会からのお願い】

聖三木図書館友の会の継続更新をお願いいたします。更新手続きと会費の納入はカウンターにて受付けます。

◎年会費＝一般三〇〇〇円、学生一〇〇〇円、賛助会員一〇〇〇〇円

◎年会費は、銀行口座・ゆうちょ口座からの自動払込みをご利用いただけます。

◎年会費をお振込みで納入される場合

みずほ銀行四谷支店　普通預金

口座番号　二〇一五八四八

口座名義　イエズスカイセイミキトショカントモノカイ

＊お名前の後に会員番号をお書きください。

◎新規入会の手続きは随時カウンターで受付けております。本人確認のための書類（運転免許証・保険証など）、学生の方は学生証をご提示ください。

「四番崩れ」にも耐えた
曾祖父・高木仙右衛門

上智大学グリーフケア研究所　高木　慶子

奇跡といわれる「信徒発見」

今年は、「日本キリシタン発見百五十年」を祝う記念すべき年である。一八六五年三月十七日、それより一か月前に献堂された大浦天主堂を、浦上のキリシタン十四～五名が見物に訪れた。その一人である杉本ゆりが、宣教師に「ここにおります私たちは、みなあなたさまと同じこころでございます。」それから「サンタ・マリアのご像はどこ？」と、続けて尋ねた。

この出来事は、全教会にとって歴史的な出来事であった。約二百五十年の間信仰に対しての厳しい弾圧を受け続け、それに一人の司祭もなく、信徒だけで先祖から伝えられた信仰を守り通したことは、奇跡的であるとも言われている程である。

唯一信仰を守り通した曽祖父

ところで、浦上キリシタンの信仰上のリーダーと言われているドミニコ高木仙右衛門は、私の曾祖父に当たるが、その血筋を外して考えるとき、偉大な信仰の持ち主であったことを、高木家に残されている「覚え書き」から知ることが出来る。この覚書は津和野から長崎に帰ってきた後、プチジャン師が「長崎と津和野で受けた拷問」についてお尋ねになったことを書き留めたものである。

それによると、まず、第一に挙げられる点は、「四番崩れ」の初めに長崎で浦上キリシタン六八人が投獄され、その後に十五人が追加され八三人が、残酷な拷問を受けることとなった。その厳しさに耐えきれなくなった八二人は、背教してしまったのであった。その中で、一人だけ信仰を守り通したのが仙右衛門であった。

信徒発見後にも続く迫害

もし、この時仙右衛門も信仰を捨てていたなら、日本に於ける今日のカトリック教会はなかったのではないだろうか。当時の政府も役人も「拷問を受けるとすぐに信仰を捨てるキリシタンか・・・」と、相手にもしてくれない状態にあったと考えられる。その後、日本におけるキリシタンの最後の迫害「四番崩れ」が起こるが、この迫害こそ、日本人が神の恵みによって頂いた信仰の深さと広さを全世界に伝える貴重な機会となった。

この「四番崩れ」は、浦上村総村民が二二ケ所に分かれて流刑にされた迫害であったが、仙右衛門はもっとも拷問が厳しかった津和野に送られた。そこでの拷問は様々の手段が使われたが、特に悲惨なものは「氷詰め」であり、数センチの氷が張っている池の中に裸で沈められ、意識が遠のくと池から上げられることが何回も繰り返されたのである。

そのような拷問にも耐え、明治政府による六年二月、キリシタン禁教令が廃止されたのを受け、津和野で迫害を受けていた人々と共に、長崎に帰ることが出来たのである。

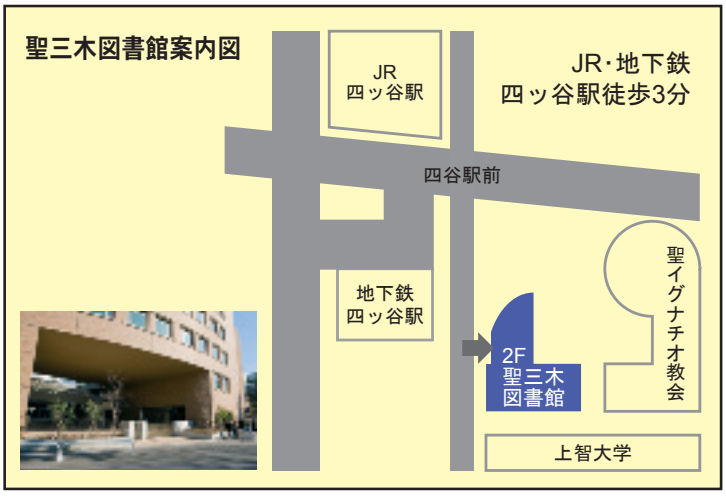
高木　仙右衛門

神のご計画　仙右衛門の帰還

仙右衛門が想像を超える拷問にも耐えて帰郷できたことに対して、私の個人的な考えがある。それは、神様のご計画は、仙右衛門を生き残すことによって、各地の流刑地より帰還した後の浦上での人々の生活が平穏に暮らすことができるために、仙右衛門をお使いになるためではなかったかと考える。つまり、帰郷した人々の間には、三グループに分けられる人々があった。それは、第一殉教者を出した家族、棄教しないで信仰を守り続けて帰郷した人々、そして、棄教した人々である。そのような人々が同じ村で生活をする中で、いろいろと問題を抱えることも想像される。そのために、仙右衛門は帰郷したすぐ後に、流刑地でのことは、タブーにすることを、村人に呼びかけたとの言い伝えがある。その呼びかけをした仙右衛門の言葉には力があったと、容易に想像できる。仙右衛門は長崎での拷問にも一人耐え、また津和野での残酷な仕打ちに対しても信仰を守り通したことは誰もが知るところであったからである。

この仙右衛門の呼びかけにより、浦上のキリシタンは平和のうちに相互に支え合いながら、信仰を強めて行ったのでないかと考える。これも正しく聖三位の神の御慈しみによるもので、この浦上キリシタンの歴史は神のなさる御業を見える形で開示しているものではないかと考えている。神に感謝。

【高木　慶子氏】熊本県生まれ。聖心女子大学文学部卒業。上智大学大学院神学研究科博士前期課程修了。博士（宗教文化）。現在、上智大学グリーフケア研究所特任所長、「生と死を考える会全国協議会」会長。援助修道会会員。著書として『それでも　人は生かされている』（ＰＨＰ研究所）、『悲しんでいい　大災害とグリーフケア』（ＮＨＫ出版）など多数。

友の会のシンボル・ネモフィラの花

東京・立川市にある国立昭和記念公園には季節ごとに花々が咲き誇っている。ＪＲ西立川駅に直結した入口からすぐにある「紅葉橋」付近には、４月末から５月初旬ともなると、薄青色のネモフィラが丘一面を埋めている。花言葉は『ゆるし』というネモフィラは、可憐な一年草だが、青空に映えて美しい。